View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Ritsumeikan Research Repository

日本と朝鮮のまっとうな過去と現在を結ぶための史観

カンドゥサン
姜徳相
（在日韓人歴史資料館館長、滋賀県立大学名誉教授）

1. はじめに

今日はお招き頂きましてありがどうございました。私の若い頃の韓国民主化のシンボル的な方でセンター長をなされている徐勝先生に初めてお目にかかり大変嬉しく思います。本日は「日本と朝鮮のまっとうな過去と現在を結ぶための史観」という題で、150 年の日朝関係の特徴についてお話したいと思います。150 年の歴史をどこまで話せるかどうか分かりませんが、日本が近代になって中央集権国家を作るなかで、対朝鮮半島ナショナリズムが、どういう形で形成されてきたのかを探りたいと思います。

はじめに個人的なことですが、私は 13 歳で朝鮮解放を迎えました。振り返ると、私の小学校時代、そして解放を迎えた中学 1、2 年のときは日本の皇民化政策にまっさかさまにぶら下がっている状態、つまり皇国少年でした。ですから、その後に解放国民あるいは独立国民としての朝鮮人を取り戻すにあたって様々な葛藤がありました。そういう意味で、今日皆さんが流暢に母国語を使い、そして論文や難しい言葉で発表されていることに、ある面では時代が変わったという思いがしています。

自分を取り戻す対象は、私から民族を奪った日本帝國主義です。ですから日本に対して私は憎悪あるいは怨念を常に持ち続けていた。そして、民族を取り戻した地点から日本をもう一回見直したとき、私が子供の頃、つねに逃げたい、隠れたい、かき消したいと思っていた「朝鮮」「朝鮮人」が恥ずべきものではなく、むしろ誇りに満ちたものであった。

本日お話するのは、そうした確信の上に立った日本の 150 年について私なりの総括です。当然先ほど申しましたように、怨念とか憎悪とかが混じっていますから、感情の介在する史観といえましょう。しかし、私は歴史学というのはそういう学問でいいと思っています。そういうことがちらちら出てくる話になろうと思いますが、私がなぜ歴史学を、日韓関係史を学ぶようになったのかについての以上のようないきさつを理解していただいて、ご海容を願いたいと思います。

2. 日本の「対韓ナショナリズム」

はじめに「対韓ナショナリズム」についてお話します。私はその根幹にあるのは「皇国史観」だと思います。「皇国史観」とは結論から言いますと日本の「自尊史観」です。そして「自尊」の踏台には常に朝鮮が置かれている。朝鮮が従属国でなければならない史観です。これを自分の体験から言いますと、私は小学校の頃「国史」の時間が一番嫌いでした。そこには神功皇后の「三韓征伐」、加藤清正の虎退治、

死んでもラッパを放さなかった木口小平、平壌の玄武門一番乗りの原田重吉、旅順港封鎖の広瀬中佐が出てくる。これら日本の「英雄」たちの舞台は朝鮮であり、あるいは、「満州」であった。この英雄物語は、教科書ばかりではなく、神社仏閣、漫画、紙芝居、講談、歌舞伎にまで及ぶ民衆レベルの常識であった。私はこういう中で子供時代を過ごしました。

ですからこれがある面で自分のトラウマになっていたのは事実です。こうした歴史がいつ、どういう意図で作られ、定着をしたのか。教科書にまで登場したのか。朝鮮解放直後、GHQ が教科書に墨を塗ることを指示しましたが、その場所というのは、今言った神功皇后、加藤清正、木口小平などの記述でした。やっぱりこれは作られたインチキの歴史だったんだ、というのがそのときの私の直感でその解明は日本の朝鮮観をかえることが可能だと思いました。

そうして歴史を学んでから色々資料を収集するなかで面白いものを見つけました。それは江戸末期から明治にかけての浮世絵、または錦絵です。美人画、役者絵、春画、風景画などのあらゆる作品を残して、いまでもあちこちで展覧会がなされています。その中に武者絵の世界があります。これはいわば戦争画なのですが、そのなかに朝鮮との戦争がいろんな形で取り上げられています。これは先ほど言った「三韓征伐」、秀吉の朝鮮戦争、あるいは神風がモンゴルを撃退したという類のものです。これらが日本の幕末から出来てくる。

これは多くの人に珍重されますから、新聞や映像、テレビと同じような役割をするわけです。日本の民衆がそれを見ることによって知らぬ間に「三韓征伐」は事実なんだという認識を持ってくる。私はここに蔑視排外ナショナリズムの拡がり方があると思います。資料を収集してそれを分析するなかでそれが見えてきました。

そのうちから今日は二つの資料を持ってきました。一つはいつからそういう思想が生まれたかを考える上で大事なことなんですが、江戸時代において、朝鮮王朝と徳川幕府は朝鮮通信使を通じたいわゆる「誠心外交」を二百数十年続けてきた。これは 1748 年の朝鮮通信使が浅草の本願寺を宿舎にして、江戸城に入府するときの写真です。羽川藤永という作者が書きました。この作品は徳川吉宗の第二子である田安宗武の子息・小次郎が持っていたそうです。この絵のなかには遠くから来たエキゾチックなものに対する憧れや好奇心はありますが、明治以降の朝鮮人に対する蔑視、差別観はほとんど見られません。

もう一つは、甲午農民軍を日本軍が「討伐」するときの絵です。1748 年には通信使をみんなが歓迎し、朝鮮に対する敵視感情は無かった。民衆は暖かい目でみている。これは江戸時代の日本の庶民と朝鮮王朝、朝鮮の民衆とのある面での親善関係であるといえます。ところが、1894 年の日本軍は朝鮮農民軍を敵視している。来年韓国併合 100 年ですが、1910 年、韓国を併合した頃の日本人の朝鮮観は全く差別、偏見、そして蔑視に満ちている。朝鮮に親愛の気持ちを持とうというものはない。それが日本の明治という時代でした。

3.「尊皇倒幕」から「征韓論」へ

大きな変化が現れるのは 1811 年に朝鮮通信使外交が途絶してからです。これは双方に理由がありましたが、この後、1820 年ごろから神功皇后が絵柄として出てくるようになります。1850 年頃になると、

これに加藤清正、豊臣秀吉、虎退治の絵が出てくる。この間に日本ではヨーロッパの来襲に備えて中央集権国家を作らなければ侵略に耐えられないということから、「尊皇倒幕」という考えが出てくる。幕府より権威がある、全国を統括できる政権を作らなければならないというわけです。そして幕府より上に立つものとして天皇家がある、つまり「尊皇」です。こういうなかで明治維新に至る政治運動が大きくなっていくのです。

そして、尊皇倒幕の思想的な背景には国学があります。『古事記』『日本書紀』の世界です。天皇を中心とする「やまとまほろば」の国を再興するというのが倒幕家の思想でした。國学を言い出したのは賀茂真淵、本居宣長ら儒学を「漢意（からごころ）」と批判した人たちです。つまり、日本には日本の国学がある。儒学を学ぶことは「漢意（からごころ）」、つまり中国、朝鮮を学ぶことだから、それはやめようというわけです。そこで『古事記』『日本書紀』がとりあげられる。「記紀」とは「やまとまほろば」の象徴的な物語です。日本の古代国家が朝鮮三国の影響を受けて出来たことが最近では色々言われてますが、この人たちは、『古事記』『日本書紀』に出でくる様々な事柄、百済、新羅、高句麗の朝鮮三国は天皇家を慕って貢物を持ってくる、臣属をしている、そのために「任那日本府」が作られた、こういったことを主張します。つまり「やまとまほろば」を支えているのは朝鮮という下の国であったというのです。

これらを併論した「尊皇倒幕」が実現したならば次に「征韓」が出てくるのは当然です。明治維新を成し遂げたのは山口県萩市にある松下村塾から出た伊藤博文、桂小五郎らであることはよく言われていますが、この人々を教育したのは賀茂真淵らの国学を大成しこれを政治のパイプへとつないだ吉田松陰です。吉田松陰はこうした人々に国学や、朝鮮は目下の国であること、日本は上国であることを教えた。吉田は「朝鮮の如きは古時我れに臣属せしも、今は則ち寖や倨る、最も其の風教を詳かにして之れを復せざるべからざるなり。〔中略〕朝鮮を責めて質を納れ貢を奉ること古の盛事の如くならしめ」（吉田松陰「幽囚録」1854 年、『吉田松陰全集』第二巻、大和書房、1973 年）と言っている。これは神功皇后のやったことをもう一度やれということです。またここでいう「古事我れに臣属せしも今は則ちやや倨る」というのは、本当は朝鮮は目下の国なのに、幕府は朝鮮と対等な関係を持たせて驕らせた、だから幕府にも責任があるという議論です。吉田は他にも「皇朝にて、神功の三韓を征し、時宗の蒙古を殲ぼし、秀吉の朝鮮を伐つ如き、豪傑と云うべし」（「講孟余話」、『吉田松陰全集』第三巻）ともいっている。日本の対外侵略は日本が上国であることの証明だというわけです。

これを信奉する連中が明治維新を起した。ここからは当然政策としての「征韓論」が飛び出してくる。1868 年、まだ函館の戦争が終ってないときに木戸孝允は大変有名な発言を残しています。明治元年 12 月 14 日の日記に木戸は岩倉具視に問われて次のように言ったと記しています。すなわち、「明朝岩公御出達に付、前途之事件御下問あり。依て数件を言上す。尤其大なる事件二あり。一は速に天下の方向を一定し使節を朝鮮に遣わし彼無礼を問い、彼若不服ときは鳴罪攻撃其土に神州之威を伸張せんことを願ふ。然るときは天下の陋習忽一変して遠く海外へ目的を定め、隨て百芸器械等、真に実事に相進み、各内部を窺ひ人の短を謗り、人の非を責め、各自不顧省之悪弊一洗に至る。必国地大益不可言ものあらん」（『木戸孝允日記　一』日本史籍協会、1985 年）という。ここで「彼の無礼を問い」という言葉が出てきますが、これは吉田松陰のいう「やや倨る」と同じです。つまり徳川と対等な関係にあることを「無礼」とみなしている。朝鮮は目下の国でなければならないということです。

ですから明治政府は朝鮮に最初に送った国書では、それまでの「大君」を「天皇」へ改め皇帝が使う「勅」、「朕」という言葉を使います。徳川の日朝関係は「大君」と「王」の関係でした。またこの頃、朝鮮は中国と冊封関係にありました。つまり朝鮮にとっては中国の国王だけが皇帝であり「朕」「勅」という言葉は、中国皇帝のみが使う。しかし、日本は事前の相談なしにいきなり「朕」という言葉を用いた国書を送りつけます。このため日朝間の外交問題となりました。これを「書契問題」といいます。

朝鮮としてはそれを受け取っては日本の風下に立つことになり、善隣対等関係の否定になるとして国書の受領を拒否します。これに対し、日本側では無礼、けしからんとして「征韓論」の大合唱が起ります。明治元年から 3、4 年の間です。例えば沢宣嘉という明治政府の外務次官は「韓国は上古素尊（スサノオノミコト）親征ノ霊跡アリ列聖綏撫ノ国ニシテソノ国脈ノ消長ハ我国ノ安危ニ関スル」という。また、対馬で朝鮮外交を担当していた佐田白茅は「朝鮮は応神天皇三韓征伐以来我附属国である。宜しく我国は上古の歴史に鑑み維新中興の勢力を利用し朝鮮の無礼を征し以て我国が版図を復せねばならぬ」と主張します。そして、「萩の乱」の首謀者たる前原一誠も「神功の三韓を征し豊大閣の征韓を興せしはみなかの不貞を責めるにあり」と言っています。萩の乱は明治政府が早く「征韓」をしないといって反乱を起したものです。江藤新平の佐賀の乱も同じことです。

以上の三つに特徴的なことは、古事記、日本書紀、神功皇后、豊臣秀吉といった過去に日本が朝鮮を「討った」歴史を前面に出していることです。これは神話の世界の話ですが、こういう形で「征韓論」の大合唱が出てくる。

ここで「征韓」の「征」の字に注目してみましょう。漢和辞典を引くとわかりますが、「彳」に正す、つまり人が行って是が非を正す、という意味です。桃太郎が鬼が島に行って鬼を退治する、こういうものが「征」です。そうした倫理観・正義感を内包するものが「征」です。ではこのとき、朝鮮は明治政府に何か非礼を行ったのか。これは違います。朝鮮は今までの慣例と違うといって国書を受け取らなかっただけです。それを「征」という字で表す。そして大事なことはこの「征韓論」という言葉が日本の歴史書、教科書で括弧付で使われないということです。全て征韓論と書いている。なぜ「征韓」という言葉が正されないのか。これは侵略論ですよ。日本史にはこの類の問題がたくさんあります。私はここに、日本と朝鮮半島の 100 年の歴史を考える際の大きな問題点があるだろうと思います。

このように「目下の国」作りというのが日本の近代にとってどうしても必要だった。そして「目下の国」は朝鮮となった。私はこれは天皇制の成り立ちと密接な関係があると思う。先ほど言った『古事記』『日本書紀』の世界、「やまとまほろば」、それが古代朝鮮三国との関係を伴っている。日本で天皇制を中心とした歴史が作られてくるときには、過去の歴史が全て書き換えられることになる。私は明治になってから日本の過去の歴史は天皇制政府の都合のいいように書き換えられたと思います。そこから朝鮮属国論が民衆に浸透していく。それが読み取れるのではないか。

4. 雲揚号事件・江華条約の意味――「三位一体の不等価交換体制」

「征韓論」が結果として引き起こしたのは西郷隆盛の下野です。そして西郷を追い出した木戸・大久保政権が雲揚号事件を挑発する。日本では西郷＝「征韓」派、木戸・大久保＝非「征韓」派であるという

言い方が常識として通っているので、この推移は奇妙に見えますが、実は何もおかしくはない。実は明治政府に結集した連中に非「征韓」派なんて誰もいなかったのです。ただ、時期や誰がそれを主導するかをめぐっての権力争いはあった。だから西郷は下野したのです。そして２年後には所謂非「征韓」派の木戸、大久保が雲揚号事件をでっちあげし、江華条約を締結する。ここに幕末以来の「対韓ナショナリズム」は一つの結節点を見ると思います。

では雲揚号事件と江華条約の意味は何か。そもそも日本は欧米との間で安政条約を結んでいた。これは不平等条約です。その内容は、第一に領事裁判権について、日本人は野蛮だから、進歩した欧米人を裁判する資格が無いとした、第二に欧米の貨幣を日本に持ち込んで日本貨幣と日本の商品を買うことができるとした。そして三番目は従価５％という関税制限を加えました。従価５％というのは、100 円のものに対して関税が５％しかかけられないことです。日本のように遅れた国が新たに産業を起こすときに、機械で作った安い欧米の商品について関税障壁を設けて、自国産商品を保護できないようになる。そういう意味で日本は、この不平等条約のために大変苦しみ、その撤廃は日本の悲願でした。これなしには日本は欧米と肩を並べることができない、そういう条約が安政条約です。

しかし、これについて吉田松陰は「魯墨講和一定、我より是を破り信を夷狄に失うべからず。ただ章程を厳にし信義を厚うし、其間を以て国力を養い、取り易き朝鮮満州支那を切り随え、交易にて魯墨に失う所は、また土地にて鮮満に償うべし」（『吉田松陰全集』）と言っています。つまり、アメリカ、ロシアと貿易をして失った損失は、朝鮮、満州で取り返す。これが吉田松陰の遺訓です。木戸・大久保はその遺訓を江華条約を結ぶことによって果たし、日本に寄せられたヨーロッパの圧力を朝鮮にしわ寄せしようとしたのです。

江華条約もまた不平等条約ですが、不平等性は安政条約よりもきついのです。領事裁判権、日本貨幣の流通、そして無関税です。日本の場合は、従価５％ですが、朝鮮は無関税です。私はこれを「三位一体の不等価交換体制」といいます。こうした不等価交換、ある意味での略奪貿易は、日本の本源的蓄積に大きく寄与することになる。これは中塚明さんや山辺健太郎さんが朝鮮貿易における不等価交換、とりわけ朝鮮産金の確保が日本の資本主義発達に極めて大きな役割を果たしたことを随分昔に提言されたことがありますが、あまり研究が深化されないまま放置されていると思います。

ではどういう不等価交換なのか。以下当時の史料を掲げます。釜山に日本人居留地が出来ますが、これについて日本政府は「居留人民ノ保護ト貿易ヲ将来盛シナラシメントスル点ニ着目アリテ爾来一艘ノ軍艦ヲ以テ釜山港ニ繋ギ目下人民保護ニ充ツルモノナリ」と布告（前田管理官御口達、郵便報知 M12.7.15）。これを「武士の腰刀のように」という。つまり朝鮮人と日本人の間にトラブルが起きた場合に、「武士の腰刀のように」威嚇し領事裁判権を行使する。

次に「朝鮮貿易ニ円ト云フハ皆我紙幣ナリ」（商況年報 M13 年）という史料があります。これは何を意味するか。当時、貨幣交換の時の支払いは、米国ドルは金貨、日本は「円銀」という銀貨です。当然金に比べれば銀は価値が落ちますから貿易決済で損をすることがありました。だから明治日本は早く金本位にしたかった。先ほどの中塚さん、山辺さんは日本が朝鮮産金を押さえたことによって金本位になっていくという大事な指摘をしています。だが朝鮮では「我紙幣ナリ」と言っている。これは紙くずですね。当時の貿易は金・銀の決済なんです。でも朝鮮にはお札を持っていく。お札なんていくらでも刷れます。

さらに「朝鮮持渡り銀貨五拾銭、拾銭、二拾銭、銅貨二銭、一銭、五厘、小銅貨寛永通宝一厘銭也（韓銭交換及為替取付調書）」（渋沢栄一「韓銭交換及為替取付ニ付調書」）と記された史料があります。銀貨五拾銭とありますが、以下寛永通宝に至るまでこれらは補助貨です。本位貨ではないのです。普通、外国貿易の決済は本位貨と本位貨の交換です。ところが朝鮮の場合、日本の本位貨ではなく補助貨を持っていって朝鮮の銀・金と交換するわけです。

朝鮮はその頃通称「葉銭（ヨプチョン）」銅銭、正確には「常平通宝」という穴あき銭を使っていました。これは日本の銅銭寛永通宝と同じ形をしています。双方銅を地金としているのでその重量を測ります。両方穴あき銭だから交換にあたってこれが一番いいということになる。寛永通宝は朝鮮の常平通宝のほぼ二分の一の重さです。こうして寛永通宝は一枚が朝鮮の 5 厘、二枚が朝鮮の 1 銭になる。当時朝鮮はまだ鎖国をしていますから、銅貨の通用価値が高いんです。それをうまく利用するわけです。寛永銭を持っていって常平銭と 2：1 で交換する。

それでどういうことが起るかというと、例えば朝鮮米一石を 40 銭で仕入れたのが、大阪の堂島市場で 6 円～ 8 円の相場がたつという現象が起きる。元山で大豆一斗 35 銭だったのが、馬関市場では 1 円 89 銭になる。こういうべらぼうな格差が出来るわけです。まさに不等価交換です。このため「百円の価格を有する輸入品図らずも一千円の価格に昇騰し和船一艘の積荷を以つて一万円の奇利を博する珍談」（日韓通商協会報告第 2 号）がざらに起る。貿易をした連中はこういうことを言っています。西欧諸国が東洋に金山を発見した如くこれと通商するもの「豈一人手ヲ空シテ帰ルモノアランヤ利ヲ得ルハ濡手ニ粟ヲツカムカ如キ」（郵便報知 M9.3.16）。

こういう貿易体制が少なくとも 1878 年から 85 年、朝鮮が欧米と条約を結び門戸を全面開放するまでは続きます。朝鮮の元山、仁川、釜山この三港の貿易は七年間完全に日本が独占します。そしてこういう不等価交換が行われる。日本商人が先鞭をつけて朝鮮経済の動脈を握る。私は朝鮮の近代の対外関係において圧迫国は欧米ではないと思っています。民族矛盾の最大の相手は日本なんです。後進国の日本がなぜ欧米に先んじて朝鮮の多くの民族矛盾の対象国になったのか。この原因はこのときの江華条約にあります。朝鮮王朝はこの後、30 年で滅亡しますよね。これがいかに大きな毒薬の役割を果たしたかが、よくわかると思います。

5. 壬午軍人暴動・甲申政変と日本

明治政府は安政条約の不平等を朝鮮に転化し、朝鮮の封建体制をより圧迫する。私は、この時の貿易関係は相当巨額であったと思います。記録としては税関の通関記録しか残ってませんが、日本と朝鮮の場合には釜山・仁川の通関を通らなくてもできるので多くは統計漏れしています。それがいかに大きいかは、江華条約から 7 年後の 1882 年に起きた壬午軍人暴動に象徴されます。当時は軍人たちの給与を米で払いますが、どんどん吸い取られていくため王朝の財政は貧しくなる。従って、軍隊の給料も遅配になる。ようやく配給されたのは石まじりの粗悪米だった。これに憤慨して軍人たちが暴動を起こしたのです。

いくら小さいとはいえ、一つの王朝がわずか 7 年にして軍人暴動がおこるような状況にまで疲弊した。

私はそれぐらいこの不等価交換体制は大きな意味を持ったと思います。政治的にも高宗を江華条約を容認した悪者だということで引き下ろせという声が出たりしますね。壬午軍人暴動も反政府の立場から起こりますが、これは軍人のみならずこの時期の侵略に反対する民衆の叫びだったと思います。軍人が暴動を起こした途端に大衆暴動に発展し、民衆を巻き込んで日本公使館襲撃という事態になっていきますが、これは江華条約に対する強い反発があったからです。この壬午軍人暴動は、近代日本が直面した最初の大衆的な対日蜂起でありました。

しかし、当時の日本国内では壬午軍人暴動を日本が不等価交換を強要したから起きたのだと論じた評論や新聞報道は何一つありません。7 月 31 日に事件の第 1 報が入りますが、出てくるのは朝鮮はけしからん、条約を無視した、日本の権利を蹂躙した、国権を侵した、という「膺懲」論です。即時開戦論を含む報復論で大騒ぎする。調べたところ、『東京日々新聞』は 7 月 31 日から 10 月 12 日まで約 40 日の間に 65 本、『横浜毎日新聞』8 月 1 日から 10 月 14 日まで 49 本、福沢諭吉の『時事新報』は一日で紙面 4 面に 35 の朝鮮に関する記事を載せました。そして二月間に、69 本の「朝鮮膺懲」論を記事にする。こうしてマスコミを通して「朝鮮膺懲」論に民衆が参加するかたちで広まる。小学生までもがこういった類の歌を投書したり、献金願い、従軍願いが出てくるのです。

このとき、日本は朝鮮に対する講和条件として済州島、鬱陵島、巨済島の割譲を要求しますが、清国の介入によって賠償金支払いだけになります。そしてこれを契機に、朝鮮を侵略するための仮想敵国として清国という目標が出来てくることになり、日本は大軍備拡張時代に入ります。

もう一つ大事なのは、自由民権運動も「朝鮮膺懲」論を声高に主張したことです。自由民権の『自由新聞』は 8 月 1 日から 10 月 21 日まで、「朝鮮膺懲」論を 25 本乗せます。この何年間の日本の拉致報道と同じですね。ここでも竹内、加藤清正が出てきます。「竹内、加藤の両君、まあ聞き給え。昔先生達の奮発で甲冑ではない笠を脱がしたので虎の肉だの飴だのべっ甲だの種々の品を貢ぐ事になつて安心だと思つて居たが近頃は……」朝鮮はのぼせあがった、と。こういう言い方ですね。

当時自由民権運動には国権論、民権論、立憲論の三つがあり、壬午軍人暴動の時期は自由民権が最も高潮した時期で有司専制政府を圧迫していた。ところが暴動が起ると「朝鮮膺懲」論を発表する。最初に出た論評は 8 月 1 日、2 日に連載されたもので、書いたのは奥宮健之です。この人は自由民権の左派で、大逆事件に連座して刑死する人で、日本の自由民権の最も左を歩いた人といって良いでしょう。この人が野党の立場から、与党系の新聞よりはるかに自由に「朝鮮討つべし」の即時開戦論を言うのです。以後も 25 本の論文にずっと出てきます。つまり、日本の近代は内に民権、外に国権なのです。

日本という国は最近でもそうでしたね。内には自由民権を言っても、外には国権にすぐなびいてしまう。こういう特徴がよく出ています。この二年後、『自由新聞』は次のような解党宣言を出します。「彼の紛々擾々として官民相軋轢するの事は実に容易ならざる害を我国に及ぼす……彼の壮年有志者の熱意をして内事より転じて外事に向はしめ」（自由新聞社説 84.9）る、と。国権が伸張すれば、民権が拡張するという論理ですね。このときから、自由党のいわゆる壮士たちはが政府の中に入ってきます。防穀令事件で脅迫外交を展開したのも自由党の壮士・大石です。閔妃事件に参加した壮士も民権派が多い。特に熊本民権党がかなり多いですね。これをみると、内の問題は争っても、外に対しては一致団結してやろうという日本の近代の特徴が垣間見えます。

これに続いて起るのが甲申政変です。壬午軍人暴動の指導者は儒教を信奉する衛正斥邪派、つまりもう一回儒教の論理に基づいて国を立て直そうという人々です。しかし甲申政変は同じ支配階級のなかでも金玉均や朴泳孝のように自ら近代化をすることを目指した人が起したものです。これを開化派といいます。彼らが日本と組み福沢諭吉の援助を受けて、1884 年に甲申政変を起す。一瞬は成功しますが日本の裏切りにあって三日天下で終わります。そして、開化派は朝鮮のなかから一掃されます。すると福沢は「脱亜論」を出し、「朝鮮国の滅亡を賀す」という文章を発表することになる。『時事新聞』に載ったものですが、ここで福沢は「我国は隣国の開明を待ちともに亜細亜を起こすの猶予ある可らず寧ろ其伍を脱し…其支那朝鮮に接するの法を…正に西洋人が之に接する風に従つて処分するのみ。」といいます。

私は福沢諭吉に多少興味があって調べたことがありますが、「征韓論」のとき福沢は「征韓論」に与してないんです。彼は日本の矛盾は欧米諸国から圧迫されることにある、だから朝鮮のような小国はわれわれの民族矛盾ではない、朝鮮と戦争して勝ったとして何の意味もないといいます。その後、朝鮮の開化派の金玉均を支援して朝鮮近代化を図ろうする。もちろん、日本のヒモつきの近代化です。ところが、彼らが全滅をした、もう朝鮮人に期待をかけて自ら近代化する力がないとみなす。ならば、俺たちはヨーロッパ人がアジアをやるのと同じようにやるべきだというわけです。ここで福沢の路線は切れます。

これは日本の国論統一と関連して重要です。こうして仮想敵国である清国と戦争する精神的準備が整うことになり、内部では欽定憲法が作られ教育勅語も生まれ精神的にも天皇制が確立する。明治の 20 年代には朝鮮を下敷きにしてそういう体制が整うのです。これは忘れてならないことだと思います。

6. 甲午農民戦争と「日清韓戦争」

そして次に決定的な段階が来ます。甲午農民戦争への介入です。甲午農民戦争は朝鮮農民と政府の内戦ですが、農民側が出したのは反封建・反侵略、そして朝鮮の農民的な改革要求です。つまり階級矛盾を無くし弱者を虐げるものを無くすことをスローガンとした農民運動でした。これは 1894 年 2 月に古阜という全羅道の村で起こりますが、東学という宗教が媒体となります。東学というのは西学に対する東学で、朝鮮独特の宗教です。それが媒体になるので東学農民戦争といい方もします。

農民軍は 2 月から 5 月にかけて討伐に来る政府軍をすべて撃退します。ここに農民の利益を代表する農民軍の強さが出ている。そして、5 月 31 日には全州城に入城し、ソウルに向かって進撃をはじめます。この農民戦争の行方に朝鮮に利権を持っている日本と清国は注目します。政府軍が勝った暁には政府と条約を結んだ特権が確保されるだろうと考える。ですからできれば政府軍が自力で勝ってほしい。そうでない場合にどう介入するか、こういったことを考えていた時期だと思います。

当時の朝鮮の封建王朝には二つの路線があった。一つは農民軍に城を空き渡すより外国軍を導きいれて弾圧するほうがよろしい。自分たちの階級的な利益を守るほうがよい。これが第一案です。第二案は農民軍の要求はもっともであると、だから彼らの要求を受け入れて王朝と政府は大改革をするという二つの案が用意されてきました。しかも論争の結果、第一案が承認されます。

その第一案を実現するに当たって引き入れる外国軍とは清国軍のことです。清国からすれば渡りに船です。介入したいと思っていたところに朝鮮から来てくれるといったわけですから、すぐに船を仕立て

て牙山に入ります。そして朝鮮の内戦に日本軍と清国軍が、出兵をすることになります。ここで大事なのは清国は内戦の一方の当事者、朝鮮王朝から呼ばれた助っ人ですが、日本軍は誰からも来てくれといわれていないということです。しかし居留民の保護という名目で入ってきます。

清国軍と日本軍は仁川と牙山で対峙しますが、政府側はこれでは内戦が国際戦争に転化してしまい、どっちが勝ってもわれわれには有利ではないと判断し、急遽、6 月 10 日に「全州和約」を結んで農民の要求を受け入れます。つまり政府は第二案を採択するのです。こうして農民と政府の合同の臨時政権が地方に生まれる。これを「執綱所」といいます。一方農民軍は全州城から撤退する。これをうけて政府は清国と日本に対して内戦は終わった、だから両方とも帰ってくれ、といいます。これを私は「民族和解政府」という言い方をしたい。朝鮮の問題は朝鮮で解決するということです。

これについて清国政府は、日清両国が同時に撤兵するならよい、とします。ところが日本は朝鮮には内政改革の力が無い、だから日清両国が兵隊を送ったこの圧力で、日清両国が朝鮮に内政改革をさせようと清国に提案します。清国はそれは朝鮮がやることだ、われわれは撤兵すべきだという。すると日本は清国にその意思がないならば、われわれがやるということで、朝鮮王宮を占領します。撤兵を要求する「民族和解政府」の打倒に動くのです。これが 7 月 23 日の朝鮮王宮占領作戦といいます。これを別に「朝鮮国王虜（とりこ）作戦」といいます。

福島大学には「佐藤文庫」という膨大な軍事資料が八千冊ぐらいありますが、そのなかには参謀本部が作った「日清戦争稿」というのがあります。その本のなかに「朝鮮国王虜作戦」の名があります。ここでは、朝鮮国王を怪我させるな、身辺を確保せよという指示がでている。王をおさえてやったことは、日韓攻守同盟を強要したことです。そして牙山にいる清国軍を日本軍をもって追放させる。朝鮮国王の委託の名の下に日本軍は牙山で戦闘行為に入り、牙山沖で清国の軍艦を撃沈する。これが 7 月 25 日です。そして牙山の戦闘後の 8 月 1 日、日本は清国に対して宣戦布告します。朝鮮王宮侵攻作戦は 7 月 23 日です。「とりこ作戦」がまさに日清戦争の序戦だったということがわかりますね。

ですから日清戦争は單なる清国と日本の戦争ではないのです。これは「日清韓戦争」なのです。当時の日本の錦絵や絵草紙や子供の読む色んな本には「日韓戦争」「日清韓戦争」と表題としたものがたくさんあります。1894 年 8 月の段階では日本人の多くは韓国と戦争があったという認識を持っていたのです。

一方、農民軍のほうはどうなるのか。和解政府がなくなってしまうわけですから「全州和約」は反故になります。そのためもう一度農民軍が蜂起します。これが 9 月です。今度は農民軍討伐の主体は日本軍になります。日本の戦線は敗走する清国を追って北上し、平壌に行き、国境を越えて中国に行きます。しかしもう一つの戦線は南方に下りていきます。農民軍と戦争をするためです。これを私は「第二次日韓戦争」と呼びます。当時の日本軍の農民軍討伐の歌には「隣邦日本の好意をも仇や敵と見做しつつ…猥（みだ）りに起す一揆ばら、竹槍の蓆旗を楯にして陰見出没限りなく　良民掠むる全羅道」というものがありますが、こういう形で、日本が討伐をしていくんですね。討伐にあっては民衆も農民も区別なしの皆殺しです。農民軍の根拠になったところはみな殺しです。ここに川上操六兵站総監からの電報がありますが、ここでも「東学党ニ対スル処置ハ厳烈ナルヲ要ス。向後悉ク殺戮スヘシ」、つまり皆殺しにしろといっている。恵比寿にある防衛庁の資料室にこういう陣中日誌はたくさんあります。これについては韓国では考古学的な発掘も相次いでいます。皆殺しされたところの墓を暴くと死体が山になってい

る。各地で発掘が進んでいます。特に忠清道の忠北大学の人たちが一生懸命これをやっています。おそらくこのときの農民の死者は３万、５万ではないだろうと言われています。非常に多いのです。

7. 植民地支配とジェノサイドの問題

私はここで「ジェノサイド」という問題についてお話したい。どこの国でもそうですが資本主義国が植民地化をするときには、反対するものはめんどくさいんで殺しちゃうんです。いま日韓の間で「植民地近代化論」が出てきて若い人がたくさんかぶれている。韓国でも猖獗を極めている。そういう人たちに私はこのジェノサイドをどう見るのかと言いたい。これは全部隠されてきています。甲午農民戦争だけではありません。日露戦争の際には日本軍に対して義兵戦争が起ります。朝鮮全土を血で染めた大戦争です。日本の『暴徒討伐誌』を見ると一万八千人位が殺されています。捕虜は三千人、傷者は二千何百人です。「暴徒」としてやったものだけですよ。これは日本軍が過少に記録した数字だとは思いますが、これだってジェノサイドです。

朝鮮総督府はこうしたジェノサイドの上に出来あがります。だから朝鮮総督府ははじめ憲兵支配ですね。憲兵は軍隊の警察です。これが民衆を支配する。憲兵にあらゆる権限が集まる。つまり、軍事占領です。朝鮮総督府は軍政なんです。そし 1919 年に「3・1 運動」が起ります。このとき、万歳を叫んだだけで殺された人は７千５百人います。「3･1 運動」は中国東北の朝鮮人集住地でも起ります。ここでもわかっているだけで４千人以上の朝鮮人が殺されています。市民も独立軍も関係無しです。そして 1923 年には関東で朝鮮人というだけで数千人が殺されています。これは植民地のコンクリート打ちの次に起こったのです。

こうしたジェノサイドはほとんど日本人側の認識としてはゼロに近い。この問題がなぜ論議されないのか。デパートでショッピングする楽しみを教えたのは植民地支配のおかげだ、鉄道に乗れるのも植民地化のおかげだという話ばかりまかりとおる。それでは日本に抗議して死んだこの人たちはいったいなんだったのか。

植民地時代には思想史あり経済史あり、あるいは音楽史もありますが、そのなかで民族として歴史の価値をどこに置くか。それは主権を取り戻すことに置かれるべきです。主権の無い経済発展なんてありえないです。そんなものは価値があると思いません。主権を取り戻すことについての歴史こそが「正史」だと思います。それに従属するかたちで色んな側面の歴史研究というのがあってしかるべきです。よって主権を回復する民族運動、独立運動の研究が植民地期の研究としては一番大事なことだと思います。

8. おわりに――「戦後日本」と植民地支配

そして最後に戦後の日本に関連して、私の体験的な話をします。戦後はもう 60 年です。植民地時代よりももっと長い。天皇制が無くなって抑圧権力が無くなった、だから日本人も朝鮮人も権力に抑圧されたものが民衆的な連帯をできるのが戦後ではないか、こう思ってました。だけどそんなもの本当にあったんだろうかというのが 60 何年経った今の私の思いです。

そもそも解放直後の在日朝鮮人排斥は大変なものでした。最近日本の警察資料やあるいはこの時に帰った人たちや日本に残った人たちの聞き書きをいろいろと分析をする人たちがいます。私も加わったことがありますが、解放直後日本には約二百数十万の朝鮮人がいましたが、一番恐れたのは、関東震災の二の舞が起こるんじゃないかということでした。あちこちでそういう空気があったようです。だから半年ぐらいの間に 150 万の人間が慌てて帰ったんです。日本はというと朝鮮人に利用価値がないと思ったときに朝鮮人排斥を始めた。私の自分の体験から言えると思います。

戦後日本がはじめにやったことは、45 年 12 月の朝鮮人の選挙権の剥奪です。そして 1947 年 5 月 2 日には外国人登録令を作り、朝鮮人については「当分のあいだ外国人とみなす」とした。翌日には新憲法が公布されますが、ここには「全て国民は」これを享受すると明記する。外国人とみなされた朝鮮人は新憲法からはずれます。そして 1948 年には教育弾圧が起る。私はこの教育弾圧が無ければ今の在日朝鮮人の位相は随分違ったと思います。48 年 9 月 9 日に朝鮮民主主義人民共和国ができ、民衆は国旗を掲げますが、これは全て弾圧される。もちろんここには米軍の指示があったと思います。

そして下山事件が起る。吉田は「あれは朝鮮人がやった」といいます。続いて三鷹事件、松川事件という不可解な弾圧が起こり、49 年 9 月には朝連が解散されます。日本共産党の前になんで朝連が解散されなければならないのか。私はいつも疑問に思っております。そして朝鮮戦争、南北朝鮮、中国、ソ連が参加していないままサンフランシスコ条約が締結される。日本の戦争や植民地支配から最大の被害を受けた人たちが、日本の国際舞台の再参加の会議に誰も加わっていないのです。ドイツが講和条約をしたときと比べてみてください。日本の戦後はどういう道を歩んだのか。アメリカの靴をなめて今日まできた日本。朝鮮戦争では朝鮮人が何百万人も死に、国土は荒れます。だけど日本は朝鮮戦争特需で資本主義の再復活、そして資本主義の最初の投資市場として台湾と韓国が選ばれる。これはいったいどういうことなんだ。どうして日本がこういうことになったのか。

朝鮮人に舐められてたまるかという一点を、近代日本は肌身離さず持っていたのです。これこそが私は日本のナショナリズムが民衆にまで広がった一つの証拠だと思います。今の拉致事件を見てもそうです。カラスの鳴かない日があっても、「拉致」という言葉が無い日は無いでしょう。日本がこの拉致の問題を契機にどれだけ右に行ったか。もう取り返しはつきません。私はそういう感じがします。加藤清正を非難することも、豊臣秀吉を非難することも言えないような、そういう入口まで入ってきます。

日本と朝鮮の間にはこういう歴史がある。そして日本ではそれについてみんな知らない。そういう意味では近代日本という私らにとってはとんでもない国が隣にいたことによって、本当に酷い目に遭ったというのが、日本と朝鮮の歴史についての私の認識です。ですから特に韓国の方に言いたいのは、日本という国をよく知りなさいということです。よく知っていく必要がある。私は日本人の、いやおそらく韓国人学者の誰よりも日本という国の悪いところについてよく知っていると思います。日本という国をよく知らないとだめです。教科書問題でも何でも根本を見ようとしないで、末梢のことだけでやっているような感じがします。いつも隔靴掻痒という印象があります。以上になります。ありがとうございます。

（本講演録は、2009 年 7 月 29 日−8 月 1 日に開催された「第 4 回 RiCKS 次世代研究者フォーラム」における講演を、講師の許可を得て掲載したものである。なお、講演録は「韓国併合」前後までを中心に

したものとなっているが、これは本来講師が 19 世紀から朝鮮解放後までの日朝関係史を講義される予定であったものを、主催側の設定した時間の都合上、植民地期、解放後については部分的に言及するに留めていただいたためであることを、ここに付記する。）